

対象物に對しては、三人づつグループを形成して、主觀的にならず、適確な客觀性を持續する方法にしては如何かと思ひます。

次に、佐伯市が市制施行三十年の記念事業として、佐伯市誌の編纂を志して実行してゐるが、委員の大半はわが佐伯史談会の会員であります。会の年末集會の時に私は次の様に發言し友が、ここに再び發言します。佐伯市がその行政区域だけを中心にした市誌をつくること、こゝとは當然なことではあるが、私が希望すること、南郡佐伯市は広域市町村圏に指定され、周辺町村は行政区域の中であり一つになることを目指してゐます。佐伯氏、毛利氏の治めて居たころの佐伯は還り一つあります。そうした意味で各町村に呼びかけ、市制三十年と區別個々意味での市誌編纂をしてほしいと思ひます。佐藤蔵太郎先生の『佐伯志』、増村博士の『佐伯郷土史』等の著述もあるが、グループによる史料編纂は、これが始めてであります。委員の皆さんが折角努力しても、本當の市誌として且郡部を含んでこそ価値があるので是非いかと考へます。さまざまの市誌では委員の方々が可愛想です。この意味で佐伯市の市長さん始め、市役所の関係者の方々に、御一考をしいただきたいと思ひます。幸いまだ印刷してゐないし、関係町村に市から呼びかけ、価値のある史誌をつくつて貰いたいと思ひます。これは私の希望であつて、自分の菲才を省すに揚言したこと、若し御理解いただけたら幸甚に存じます。

一月九日、野津探究會と佐伯史談會の合同研修會が佐伯市に於いて開かれることになつてゐるが、現地研修の後の研究會では、お互の史料の交接が出来る研究會でありたいものと考へます。元來他の會との接触は儀禮的になりがちであるが、これを機会にさう云う方向にもつ

ていつて貰いたいと思ひます。

弥生町は四十六年度、年末の文化財調査委員会で、所の文化財施策に對し次のように話し合つたが、これについて皆様に伝えたい。文化財に對する保護、保存は、従来通りきめ細かくして遺憾のないようにしたい。特に町が計画して居る中央公民館の建設に伴ない、この中に文化財收蔵室を造つてもらい、文化財並に民俗資料の收容を町に働きかけるといふことが方針として打ち出され、本年かこれ強く推進したいと思ひます。

新春二日の史談會の初歩きには是非参加して、佐伯城址を中心にした探求に半日を費したいと思ひます。城山の上から見る佐伯市の市街は佐伯湾、白濁八幡の静寂さと、胸一ぱい味あいたいものです。

思つたことを後先なく走り書き、皆様に御見せするのですから、失礼なこととは存じますが御容謝願ひ度い。今年もよろしく御指導御啓示のほどを、本年ながらお願い致します。(S47.1.1年前3時)

研究

毛利歴代の名前について

會員 佐 脇 貫 一

佐伯藩主毛利氏代々の本名(諱)については諱と方が難しくわからぬという人が多いが、増村隆也先生の佐伯郷土史には次のように讀んでゐる。

- 初代 高政(たかまさ)
- 二代 高成(たかなり)
- 三代 高尙(たかたか)
- 四代 高重(たかしが)

五代 高久 (左かひさ) 六代 高慶 (左かよし)
 七代 高丘 (左かおか) 八代 高標 (左かすえ)
 九代 高誠 (左かのぶ) 十代 高翰 (左かむか)
 十一代 高養 (左かやす) 十二代 高謙 (左かあき)
 十三代 高範 (左かのり)

しかしこれに読み慣わされておるといふだけで、果してこのとおりに読まれたかという問題で、例えはさる日羽柴先生が山中道夫先生と訪れた際、山中先生が十二代高謙の読み方について『左かあき』は誤りで『左かかた』が正しいと教えられたというが、左しかに『謙』の字は『あき』と読んだ場合、慍 (あきらまない、あきら) の字義となり『かた』と読めば賢に通じて謙名に通ずるといふ。

そこで私は初代高政以来歴代の諱 (本名)、幼名、字 (あだな、別名)、号などを可能なかぎり調べて見た。とくに本名の読み方については諸家系譜の慣例に従った。

初代 高政 (左かまさ)、幼名 (通称) 勘八、まは官八、勘八郎ともいふ。氏部大輔、後伊勢守。
 二代 高成 (左かなり)、幼名 勘八郎、根津守。
 三代 高尚 (左かたか)、幼名 市三郎、前名 高直 (古文書類の署名による) 伊勢守。

四代 高重 (左かしげ)、幼名 主殿、安房守。
 五代 高久 (左かひさ)、通称 頼負、久留島信濃守通清の三男、駿河守。

六代 高慶 (左かよし)、幼名 千代熊、通称 助十郎、元禄二年高定 (左かさだ) と名乗り、後高寛 (左かひろ) と改め、享保十四年さらに高慶と改む。周防守。

七代 高丘 (左かおか)、幼名 寅太郎、前名 徳高 (よし左か)、周防守。
 八代 高標 (左かすえ)、幼名 考三郎、字 培松、号 霞

山。宝暦十年高代 (左かしろ、左かよし) と名乗り、明和八年和泉守に任官、高猷 (左かむか) と改め、天明七年さらに高標、寛政元年和泉守改め伊勢守。

九代 高誠 (左かのぶ、左かまさ)、岩之助、字 実天、明和八年高聽 (左かきく) と称し、寛政四年美濃守に任官、享和元年高明 (左かあき) と改め、文政二年 (退隱後) 高政と称し、更に高誠と改む。

十代 高翰 (左かむか)、幼名 深菊、のち栄之助、字 伯飛。はじめ若狭守、後豊前守と称し、さらに出雲守に任ぜらる。

十一代 高養 (左かやす)、幼名 岩之助、字 大來、号 豊山、はじめ伊勢守、のち安房守となる。
 十二代 高謙 (左かあき)、幼名 栄二郎、のち岩之助、字 伯光、号 鶴山。はじめ美濃守に任じ、後伊勢守。

十三代 高範 (左かのり)、幼名 侃次郎、肥後守 戸藩細川行真の子。(おわり)

余目下
 県南の鐘乳洞について

石炭山の多い県南には、到るところに鐘乳洞があり、中には調査不充分や全無(木登先)のものがあることが認められる。参考までに書いよう。
 風連鐘乳洞 (山麓) 仏座の洞穴 (本道) 杉生原石山鐘乳洞
 小洋鐘乳洞 (本道) さかかたの洞穴 (。) 津久見原石山鐘乳洞
 神性鐘乳洞 (西葡) 前高社の洞穴 (。) 津久見原石山鐘乳洞
 白石鐘乳洞 (本道) 尺間白渡の洞穴 (林芝) (鐘乳石の発達していない洞穴、即ち石炭河も
 白谷鐘乳洞 (。) 長畑の洞穴 (。) 新井の洞穴 (。と、鐘
 聖殿洞穴 (。) 西神野魚野社の洞穴 乳洞をもつていふ) (。)